

東京外語大教授

中嶋 嶺雄

東欧諸国の変革を受け、中国と東欧は百八十度路線が違う両極に位置してきた。ソ連といえば、中

たことで、一党独裁堅持の中

会総会が党の指導的役割を定めた憲法第八条の修正に伴う複数政党制への移行を決定し

断固拒否の保守派との間で、激烈な権力闘争が展開され内部分裂する可能性がさらに高

まってきたのではないかと爆発しても不思議ではない

国と東欧の中間地点に在るといふ立場だが、今回のソ連共産党拡大中央委員

平(前党中央軍事委主席)以後に向けて、党指導部内でもソ連・東欧の改革を徐々に受け入れていこうとする勢力と

を具現化していただろう。ルーマニアのチャウシエスク大統領(同)が射殺された際、そのニュースを聞き中国各地で爆竹が打ち鳴らされた

の動きをよく知っている。今後、共産党一党独裁を否定して新党を結成しようとの改革の動きも必ず出てこよう。党指導部内部でも、現在、江沢民総書記と李鵬首相の確執の兆候があり、内部分裂の事態に発展することも十分考えられる。また趙氏の復活の可能性も否定できない。現在、中国ではすでに鄧以後に向けた大変革が確実に萌芽(ぼうが)しつつあるといってもよいだろう。(談)

私はこう見る

# ソ連変身後の中国

— 1 —

## 指導部分裂の可能性高まる

国とソ連の間の亀裂は確実に深まる。だが、そのことが中ソ対立の再現をもたらすほどの活力と余裕はもはや中間にはない。

中国は東欧の変革が起こる以前の昨年春、民主化運動が盛り上がった。それが人民解放軍の武力制圧という「天安門事件」で押しつぶされた。も

い。当局は民主化への締め付けを一層強め共産主義を守るため結束を高めよう。中国では東欧やソ連の改革の進展に関する報道が抑制さ

れているが、中国の民主化を願う人々は日本のNHK短波放送や米国のVOA(アメリカの声)放送を聞き、民主化

革・民主化の大きな動きは中国にも強い影響を与えずにはおかない。最高実力者、鄧小

平(前党中央軍事委主席)以後に向けて、党指導部内でもソ連・東欧の改革を徐々に受け入れていこうとする勢力と断固拒否の保守派との間で、激烈な権力闘争が展開され内部分裂する可能性がさらに高まってきたのではないかと爆発しても不思議ではない

を具現化していただろう。ルーマニアのチャウシエスク大統領(同)が射殺された際、そのニュースを聞き中国各地で爆竹が打ち鳴らされた

の動きをよく知っている。今後、共産党一党独裁を否定して新党を結成しようとの改革の動きも必ず出てこよう。党指導部内部でも、現在、江沢民総書記と李鵬首相の確執の兆候があり、内部分裂の事態に発展することも十分考えられる。また趙氏の復活の可能性も否定できない。現在、中国ではすでに鄧以後に向けた大変革が確実に萌芽(ぼうが)しつつあるといってもよいだろう。(談)

中嶋嶺雄(なかじま・みねお)一九三六年生まれ。東大大学院国際関係論課程卒。国際関係論。